

2018年度博士論文（要旨）

認知症の社会文化的表象について

—新聞報道と小説を中心として—

桜美林大学大学院

城戸 亜希子

目次	
序章	1
1. 研究の背景と目的	1
2. 先行研究	3
3. 本論文の構成と概要	5
第一部 認知症をめぐる社会の変化 —新聞報道を中心として—	8
第一章 明治から昭和初期における「痴呆（痴呆症）」	8
1. 認知症とは何か —医学領域における概念とその研究—	8
2. 辞書における「痴呆（痴呆症）」の定義と病名の一般化について	12
3. 新聞記事の分析の対象と方法	13
4. 明治期の認知症 —「痴呆」という語とその意味—	14
5. 大正から昭和初期の「痴呆」に関する報道	18
第二章 戦後の痴呆症・認知症表象 —社会意識の変化について—	21
1. 分析の目的と方法	21
2. 病名の一般化について	21
3. 社説で取り上げられた内容	22
4. 戦後の年代別問題意識の変化	26
1) 年代別記事数の推移	26
(1) 認知症を取り上げた記事数の推移	26
(2) 他の病気に関する記事数との比較	27
(3) 投書の件数	27
2) コーディング作業によるカテゴリー分類	28
3) 年代別問題意識、社会意識の変化	29
(1) 戦後から1970年代 —医学的観点からの啓蒙時期—	30
(2) 1980年代～1990年代後半 —家族介護の時代—	31
(3) 1990年代後半～2000年代前半 —認知症介護の社会化—	35
(4) 2004年～2007年 —若年性認知症の社会問題化—	37
(5) 2008年以降 —認知症問題の多様化—	38
第二部 認知症の社会文化的表象 —小説の分析を中心として—	41
第三章 島崎藤村『夜明け前』に描かれた「狂気」の症状	41
1. 作品と時代背景	41
2. 青山半蔵の病	43
3. 周囲の反応と心情	48
第四章 中村古峽『殻』に描かれた早発性痴呆症	53
1. 作品と時代背景	53
2. 為雄の症状とその描写	54

3.	患者を取り巻く家族と環境	59
4.	早発性痴呆症患者への治療と精神病院	66
5.	他の作品における痴呆症患者	70
第五章	非人間化される認知症高齢者 ―戦後の痴呆症・認知症表象―	75
1.	丹羽文雄『厭がらせの年齢』に描かれたうめ女	75
2.	うめ女を取り巻く状況と家族の反応	80
3.	精神病院における老耄性痴呆症の母 ―安岡章太郎『海辺の光景』(1959)―	85
第六章	表出される老いの恐怖 ―『恍惚の人』に描かれた老人性痴呆症―	90
1.	はじめに ―時代背景―	90
2.	認知症の恐怖と老醜のイメージ	93
3.	認知症に対する誤解	99
4.	中年期の身に迫る老いの不安	105
第七章	本人視点による認知症の自己表出 ―若年性認知症を描いた小説―	111
1.	若年性認知症をテーマとした小説の登場	111
2.	若年性認知症患者が感じる異変	116
3.	告知後の反応	119
4.	自分が壊れていく過程	127
5.	恐怖の対象 ―記憶とアイデンティティー―	136
終章	結論、残された課題	141
付録		1
謝辞		6
注		i
参考文献		i

1. 研究の背景

病は古くから社会を恐怖に陥れてきた。病が一種のメタファー（隠喩）を持ち、いかにこれらの隠喩が人々の間に浸透し、病気に対する神話化されたイメージが作られているかを明らかにしたのは、Sontag である。Sontag は自身が癌患者になった経験から、病名としての「結核」や「癌」という言葉が特殊な意味をもって社会や人々に浸透し、人間の思考や行動を左右してしまうことを西欧の文化、文学、言説等から解き明かした¹⁾。

日本では、近代文学において、結核が一種のメタファーとして「貴族的な容貌の新しいモデル」となり、結核のロマン化を促したと言われており²⁾、結核がロマン化していく過程が詳細に辿られている。ロマン化された結核のイメージは近代社会に広まったが、一方で癌は苦痛、激痛に七転八倒する恐怖のイメージが近現代社会に浸透し、多くの人を苦しめてきた。

同様に、近年社会問題化して、多くの人を恐怖に陥れているのが認知症であろう。

認知症高齢者は古くは「老耄」、「ボケ老人」などと言われ、認知症による異常な行動や不潔行為に嫌悪感が抱かれ、「恥ずかしい」と考えられたため、「恥の病気」として多くの家族がその存在を隠してきた。そのためなかなか認知症患者の実態は明らかにならなかった。

しかし認知症患者の様々な実態が明らかになるにつれ、この病気に対する社会的な恐怖感は増し、いまや「認知症になったら大変」というイメージが広く一般社会に浸透している。認知症はなぜこれほどまでに恐れられるようになったのか。認知症に対する否定的イメージはどのように生み出されてきたのであろうか。

認知症は決してなったらおしまい恐ろしい病気ではない。認知症を異常と捉え問題を複雑化し、恐怖のイメージを作り出しているのは、世の中の偏見、社会によって作られた否定的認知症観であると東田は述べている³⁾。そして、この社会的認知症観に大きな影響を与えたのは有吉佐和子の『恍惚の人』（1972）であると言われている⁴⁾。この作品によって多くの人の認知症観が決定的に変化したというのである。

しかし、認知症に対する否定的なイメージはこの作品の影響だけではないだろう。1970年代の新聞記事において、認知症高齢者は「老醜」、家族にとっては「はた迷惑な存在」であり、「狂人ではない一種の廃人」と言われていたのである⁵⁾。小説だけではなく新聞を中心としたメディアも一般社会に浸透する認知症観の形成に大きな影響を与えたと言えるのではないだろうか。

近年海外でも認知症の社会文化的表象についての研究が進められており、欧米社会において認知症、アルツハイマー病が政治、社会、文化的事象や表現と結びつき、特定のイメージを作り出していることを Behuniak や Zeilig が明らかにしている^{6), 7)}。日本における認知症に対する一般化されたある特定のイメージも、古くからの社会文化的事象が結びついて作られてきたものではないだろうか。

認知症は 2004 年に改称されるまで痴呆症と呼ばれていたが、精神の病にかかることを明治の終わり頃は「痴狂」、老いて心身が衰えることを「老耄（ろうもう、おいぼれ）」と呼び、時代の推移とともに病名や概念は変化を遂げてきた。長い間使われていた「痴呆症」の「痴呆」という

言葉をあまり使いたくないという人は、その理由を「この言葉に呆けてしまって、手のつけられない、衰えた人間という印象があるから」と言う。嫌悪、恐怖の対象とされる否定的認知症観は、『恍惚の人』が出版される以前の、もっと古くから使われてきた「痴呆」という語が含有する意味や「痴呆」に結びつく社会文化的事象によって生み出され継承されてきたものではないだろうか。

このような問題意識に基づき、本論文では、医学的な認知症の概念、病気の歴史を踏まえうたえで、近現代の社会的文脈のなかで認知症がどのように表されてきたのかを明らかにする。認知症が改称される以前の痴呆症の疾病の歴史を辿り、現在の認知症観への影響、そこに内在する問題、変化の過程を明確にしながらか、その諸相を社会文化的状況のなかで捉えることが本論文の目的である。

近代から現代にいたる日本社会において、認知症という病気とそのイメージは、メディアや小説を媒介としてどのように広まり、受容され、病気に対する誤解や偏見を作り出してきたのか。一般市民が目にする近現代の新聞記事、小説における描写と表現に注目しながら、認知症表象がどのように変化し、社会的認知症観に影響を与えてきたのかを考察する。

多くの人をいまなお生きにくくさせているといわれる認知症観の形成について、歴史を振り返り社会文化的な要因を検討することは、今後の超高齢化社会、認知症対策を考える上で非常に重要である。多様に捉えられた認知症のイメージを引き出し、認知症とともに生きる人々への智慧や創造を本研究は示すことができると考える。

2. 各章の概要

第一部

第一部では、新聞記事における認知症表象を分析する。認知症に関する新聞記事を対象として、病気の歴史を概観し、認知症が社会的文脈のなかでどのように表され、捉えられてきたのかを明らかにする。認知症に関する表現に注目しながら認知症を取り巻く人々の内面化も含め、時代とともに変化する社会的認知症観について言及する。

第一章

明治期から第二次世界大戦前までの新聞記事を対象として分析、考察する。特に注目するのは、認知症が 2004 年に改称される以前に使用されていた「痴呆」、「痴呆症」という語の社会的表象である。認知症はこの「痴呆」という語を伴って一般社会でどのように捉えられ認識されてきたのか。「痴呆」に関する新聞記事を時系列的に追って確認する。ここでは対象となる記事数が少ないため、記事を量的に扱うのではなく、各記事における「痴呆」の意味や使われ方、語られ方に注目する。

オンラインデータベースで確認可能な 1872 年から 1940 年代前半までの『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』の記事を対象として、見出しとキーワードに「痴呆」（同義語を含む）が含まれ

る記事を対象として検索し、『朝日新聞』で 62 件、『読売新聞』で 14 件、『毎日新聞』では 0 件で、合計 76 件が抽出された。

抽出した記事を対象として、「痴呆」という語の使われ方とその意味を確認した。その上で当時の「痴呆」についての社会的概念や病気観について考察した。

第二章

戦後から 2014 年までの記事を対象として、認知症に関する問題意識の変化を確認する。各年代でどのような特徴が見られるのか。当時の人々の認知症への関わり方や社会意識の変化を記事の内容の分析から考察する。

新聞は、記録性、影響性、社会性等の要素が総合的に判断され発信されているため、社会性が高い問題についてはより時代を反映した問題であることを伝えることが新聞の一つの使命となっている⁸⁾。したがって当時の記事には、その時代の人や社会の様々な姿が映し出されていると考えられる。多くの一般市民が目にする新聞において、認知症がどのように表現され、受容され、社会意識が変化を遂げたのかを時代の推移とともに整理し明らかにする。

第二部

第二部では、第一部における新聞記事の分析によって浮かび上がった時代、社会背景を踏まえ、認知症を取り上げた小説を分析対象として認知症表象を明らかにする。対象とするのは、明治期から現代までの小説である。小説は、登場人物の設定や視点、内面描写、構造が効果的に設定され、描写されることで、現実の問題や心情をより強度に映し出すことができる。

そこで、広く社会に影響を与えたと考えられる認知症あるいは認知症に該当する症状、認知症が改称される以前の痴呆症について書かれた小説の一部を対象として、病気や症状をめぐる表現に注目しながら、病気の概念の変化と時代とともに変容する認知症観について考察する。

ここではまず認知症について書かれた作品にはどのようなものがあるのか、その背景と存在を辿る。第二にこの病気がどのように描かれてきたのか、その描写を第一部で浮かび上がってきた時代状況とともに同時代の文脈に沿って読み解いてみる。認知症という病気とその症状は、読者の側でどのように受容され、現代の認知症観が形成されてきたのか、その影響について考察する。

第三章

明治初期における痴呆症の症状とその描写について見ていく。分析対象とするのは、島崎藤村の『夜明け前』である。この作品における青山半蔵は晩年になって奇行を見せるようになり、周囲から異常と恐れられ忌み嫌われるようになる。半蔵に現れる症状は、アルコール依存症か精神分裂病によるものと言われており⁹⁾、当時の概念である「痴呆」の症状とも関連性が深い。精神を患った半蔵が、「狂気」、「異常」と捉えられていく過程を、本人と周囲の描写に注目しながら読み解き、明治初期の精神病を取り巻く状況について考察する。

第四章

明治後期に書かれた中村古峯の『殻』に描かれた痴呆症患者の姿と周囲の人々の心情を追っていく。明治後期になると、「痴呆症」は「病気」として捉えられているが、「痴呆症」の概念は、「麻痺性痴呆症」あるいは「早発性痴呆症」であり、どちらも社会的にはよいイメージがなかった。なぜなら第一部における新聞記事の分析から考えられるように、当時の犯罪者の多くがこれらの痴呆症患者であるという報道が多くなされたことが一つの要因である。当時の「痴呆症」は小説ではどのように捉えられていたのか。『殻』を対象として、病気の症状の描写と周囲の心情を中心に読み解いてみる。

第五章

戦後の混乱期に発表された丹羽文雄の『厭がらせの年齢』（1947）と安岡章太郎の『海辺の光景』（1959）を対象とする。この二つの作品に共通しているのは、認知症の症状を示す高齢者が非人間化された「異物」として描写されていることである。

『厭がらせの年齢』で特徴的なのは、完全な他者としての語り手の存在である。その視点は冷淡で認知症の症状を示す 86 歳のうめ女は「死にそこなって恥を晒す老人」と言われている。家族制度と敬老精神が崩壊した戦後社会において、うめ女のような身体、精神が衰えた高齢者はどのような位置づけで捉えられていたのか。当時の社会のまなざしについて考察する。

『海辺の光景』は、嗅覚と視覚によって表現された「老耄性痴呆症」の母の症状が特徴的である。母親は社会から断絶された精神病院に隔離されている。息子の信太郎は母の痴呆症をどのように捉え感じているのか。精神病院という場所で死期を迎える痴呆症の母の描写を読み解いていく。

第六章

立ち遅れている高齢者対策に警鐘を鳴らし、高齢者福祉の推進に貢献したと言われている有吉佐和子の『恍惚の人』（1972）を対象として、作品に描かれた老人性痴呆症の茂造の表象に言及する。有吉は、数多くの否定的な語で茂造を表現し、認知症に対する不気味なイメージを作り出し、読者に老いへの嫌悪感を抱かせた。当時まだそれほど問題視されていなかった中年期の身に迫る老いの恐怖感を表出させたこともこの作品の大きな特徴であり、それを視点として表現した痴呆症が老醜、醜悪と捉えられた。この作品によって社会的認知症観はどのように変化したのかを考察する。

第七章

認知症が高齢者だけの病ではないという認識が広く日本に浸透する契機となった荻原浩の『明日の記憶』（2004）をはじめとする 3 作品を対象として、それまでとは違った視点で描かれた認知症を分析する。対象とした作品の視点はいずれも認知症患者本人に設定されているため、本人の病気に対する苦悩が作品の主要かつ重要なテーマとなっている。それまで表面化することがな

かった認知症患者の内面が初めて若年性認知症という病によって描き出されたのである。作品に描かれた認知症患者の内面と患者から見た世界を浮かび上がらせ、否定的認知症観の根幹をなす恐怖の対象について考察する。

3. 結果と結論

認知症が改称される以前の痴呆症の「痴呆」という語には、「あほう、ばか」という意味が含まれ、明治初期にはこの意味での使用が多かった。記事では、「愚か者」という意味で使用、掲載され、しばしば「狂人」と並列で使用されていた。そのため古くから「痴呆」という語自体が良い意味で使われることがなかったと考えられる。

徘徊や見当識障害の症状を示す高齢者は古くから存在し、明治初期には「老耄」、「老い耄れ」、「発狂」、「気が変になった」などと言われ、新聞記事では高齢者の徘徊や見当識障害の症状は、「奇妙な珍事」として伝えられていた。その論調から、当時痴呆（痴呆症）の症状を示す高齢者への社会のまなざしは比較のおおらかなものであったことが伺える。しかし、実際に、「痴呆」の状態のように、精神の異常を示す者の家族はその対応に苦悩していたことが、島崎藤村の『夜明け前』に描かれていた。作品のなかの晩年の半蔵の奇行は「狂気」によるものと語られ、老いに伴う様々な喪失感とともに症状が徐々に悪化し、家族だけではなく村人たちをも恐怖と不安に陥れた。病院などない山村では、半蔵を座敷牢に隔離するしかなく、それを受け入れることは、本人にとっても家族にとっても耐えがたい苦痛であったことが作品に描かれていた。精神の病を抱えていると考えられた半蔵は、家族や周囲の人々の「重荷」となっていたことが示され、この周囲の苦悩は現代の家族の苦悩の心情にも共通していると考えられる。

明治後期から大正、昭和初期になると、痴呆（痴呆症）は、精神病の枠組みで捉えられるようになった。犯罪や事件の犯人が、いわゆる「麻痺性痴呆症」、「早発性痴呆症」といった痴呆症患者であるという報道が増加し、「痴呆症」という病が「狂人」、「狂気」、「異常」、「精神病」等という語を伴って、嫌悪、恐怖のイメージと結びつくようになった。2004年に「痴呆症」から「認知症」に改称される際に、「痴呆」という語感に対しての反発が強いということが改称の理由の一つとして挙げられたが、この「痴呆」という語の否定的語感、元々の漢字が持つ否定的な意味に加え、明治期からの「愚か者」としての「痴呆」という言葉の使われ方や、その後昭和初期まで見られた犯罪や事件の犯人が、凶悪な痴呆症患者であるという報道が生み出した狂気、恐怖のイメージに起因するものである。

中村古峯の『殻』には、早発性痴呆症患者である為雄の症状が詳細に描かれており、ここでも患者の言動の異常性と家族の苦悩が耐え難いものであったことが示されていた。為雄の症状の悪化に伴い、家族の為雄に対する感情が、嫌悪、忌々しさへと変化し、痴呆症という病が、家族、兄弟の関係をも悪化させる要因となっていることも示されていた。そしてこのような精神の病の者が家族に存在することを「恥」と考え、家族以外には知られたくない、何とか家族内で問題を解決したいという家族の強い思いも作品に描かれていた。当時精神病患者への有効な治療法がな

い状況下で、患者を抱えた家族はあらゆる治療法を模索し苦悩していた。明治期から大正期の精神病患者は家族と社会の犠牲になった者と捉えられていた。

身体が衰え、精神までもが衰えた高齢者は、関東大震災や第二次世界大戦後の混乱期には、生産性がない無能な者として冷遇され、次第に社会が持て余す「厄介な荷物」として扱われていった。この頃の長寿は健康を示すものでも喜ばしいものでもなかったことが示唆される。

丹羽文雄の『厭がらせの年齢』に描かれた 86 歳のうめ女は、「死にそこなって恥を晒す老人」として描かれ、周囲からは「恥」、「迷惑」と考えられていた。このような社会状況により、当時の痴呆（痴呆症）観も否定的な側面が増長されたと考えられる。

戦後になると、戦前に頻繁に報道されていた「早発性痴呆症」、「麻痺性痴呆症」に関する記事は見られなくなった。代わって「老耄性痴呆症」や「老人性痴呆症」という語が使われ始めた。1980 年代までは、認知症の症状を示す高齢者は、「老人ぼけ」、「ぼけ老人」と呼ばれることが多く、一般的にはまだそれほど深刻な問題として捉えられてはいなかった。

1972 年に有吉佐和子の小説『恍惚の人』が出版され、認知症が精神病の一種である「老人性痴呆症」として広く病気として知られるようになったが、この作品で有吉が演出した「老醜と恐怖のイメージ」により、この作品を読んだ多くの人が老いを嫌悪し不安を感じるようになったことが新聞記事で示されていた。新聞でも 1980 年代から専門家による研究記事、啓発記事等により「老人ぼけ」や「老人性痴呆症」が取り上げられるようになったが、そのような患者が家族に存在することを多くの家族は「恥ずかしい」と考えており、認知症について広く語られることはなく、また語る場もなかった。

1990 年代前半までは日本経済のバブル期と重なり、高齢化自体がまだそれほど深刻に捉えられておらず、認知症に対する社会の関心も低かったと考えられる。認知症高齢者自身も「介護される存在」、「何も分からない人」として扱われていた。1990 年代後半になると、認知症の高齢者を介護する家族の苦悩や孤立感は限界に達し、新聞での連載記事や介護者からの投書、家族会の活動などを通じて、介護の実態が伝えられるようになった。同時に北欧等の家庭的な雰囲気ของกลุ่มホームケアなどが紹介され、認知症に関わる介護者の負担だけではなく、被介護者自身の心にも注目されるようになった。多くの異常と思われる行動にも意味があることを述べる記事や認知症高齢者への対応の仕方に関する記事が増加した。小説では、介護者と被介護者がともに高齢となる老老介護の問題を示唆する作品などが登場し始めた。

2000 年の介護保険制度の施行をきっかけに、認知症は家族問題から社会問題へと発展した。介護者の高齢化、男性介護者の増加、介護苦による殺人や心中が増加し、認知症が「深刻な病気」、「社会全体の問題である」という認識が浸透した。2000 年半ばになると、若年性認知症への関心も高まり、それまで介護者によって語られる認知症であったものが初めて患者自身によっても語られるようになり、本人も家族も受入れ難かった認知症が少しずつ前向きに捉えられる認知症へと変化を遂げていることが新聞記事で示されていた。

若年性認知症を取り上げた小説や映画も登場し、患者自身も苦悩していることが知られるようになり、認知症が高齢者だけの病気ではなく、身近に存在する病気であることが認識されるよう

になった。若年性認知症を描いた小説では、記憶が個人のアイデンティティの形成と周囲との関係の構築に重要な役割を果たしているため、認知症によって記憶が失われていくこと、それにより自身の存在さえもが否定され孤立してしまうことを、認知症患者が恐れていることが示されていた。

2010年以降の社会では、より認知症に関する認識や理解が進み、地域での活動や交流を活発化させて認知症に関わる人が偏見なく安心して暮らせる地域づくりに取り組もうとする意識変化が見られた。福祉や制度だけに救いを求めるのではなく、幅広い世代の人々が主体的かつ積極的に認知症問題に取り組むようになったことが示されている。

認知症には古くからの「痴呆」という語と「痴呆症」という病名が作り出した否定的なイメージが存在し、それが「恥ずかしい病」、「語られない病」として広く長く日本社会に浸透した。「痴呆症」が「認知症」と改称されたからといって、簡単に病気のイメージが払拭されるわけではない。痴呆（痴呆症）という語が含有していた否定的な意味は、現在でも継承され、いまなお認知症を恐ろしい病気の一つと考える人も多い。しかし、多くの人々が認知症について語る事が可能となり、語られることによって、少しずつ認知症に対する病気観は変化を遂げてきたのではないだろうか。

認知症は、決して恥ずかしい病気ではない。多くの人にとって無関係ではない身近な病気へと変化を遂げつつある。かつての「恥」の概念を変え、認知症を前向きに捉え、主体的に取り組もうとする意識変化が生まれたのは、認知症が語られるようになり、認知症の人に接する機会も増えてきたからではないだろうか。認知症がまだそれほど知られていない頃、認知症患者を抱える家族は患者の異常と思われる行動が理解できず、周囲の理解も得られないことで苦悩してきた。新聞は投書や連載という形で認知症に対する理解を社会に求め、病気について語る場を提供したのである。

認知症が広く語られるようになったことで、同じ状況下にある家族や患者自身の精神的な負担が軽減されることが投書や連載に示されていた。今後ますます増加すると言われる認知症が、特別な病気ではなく、ごく普通に受け入れられ、認知症に関わる多くの人々が安心して生活できるような社会にするためには、新聞等のメディアや小説が媒介となって、より広く積極的に認知症が語られる必要があると考える。

近年になってようやく認知症を前向きに捉えようとする表現が見られるようになってきた。「認知症になっても不便だけれど不幸ではない」、「認知症でも働けます」という表現は雑誌における一例¹⁰⁾だが、認知症700万人時代を迎えようとしている今、我々は認知症に関する表現に工夫を加え、認知症の恐怖と嫌悪のイメージを変えていく必要があるだろう。

4. 今後の課題

今後の課題は、まず、認知症の医学的概念の変化を整理し、認知症の社会的表象との関連性を分析、考察することである。病気のイメージは、医学の進歩と密接に関係している。結核による

死亡者はいまなお存在するが、多くの人にとって、結核はもはや恐れる病気ではない。また、癌についても同様のことが言われ始めている。若年性認知症を描いた小説では、認知症ではなく癌になればよかったと嘆く主人公が登場した。認知症の登場によって、かつて最も恐れられる病気の一つであった「癌」の恐怖のイメージが変わりつつあるのではないだろうか。若年性認知症患者は作品のなかで「癌」を、「闘うことができる病気」、「闘うことによって称賛される病気である」と述べている。痴呆症・認知症も医学的概念の変化によって、病気のイメージが変化を遂げてきたが、残念ながら本論文では、認知症の医学的概念の整理が十分ではない。今後は病気の医学的概念の変化と社会的病気観との関連性を追究することが必要となるだろう。

二点目の課題は、認知症に対するイメージとメディアの影響、関連性を更に分析、考察することである。病気の恐怖感やイメージは、視覚的に捉えられた症状も強く影響していると言えるのではないだろうか。その意味で、認知症は今後どのように表現されていくべきかが重要な検討課題であると考えられる。

病気と病気のイメージが人と社会に与える影響は計り知れない。その影響をより深く探ることが今後の重要な課題である。

- ・ 本論文の引用には現在の用語基準に照らして、一部不適切な表現が含まれるが、本研究が対象とする時代特有の歴史的、文化的背景を示す目的で原文のまま使用している。筆者個人の価値観を反映したものではない。
- ・ 「痴呆」および「痴呆症」は 2004 年 12 月に「認知症」と改称されたため、本論文においては原則「認知症」を使用しているが、当時の歴史的、文化的状況、医学的概念に基づくもので、分析、考察のために必要な場合は、原文で使用されている病名および「痴呆」、「痴呆症」等の旧呼称を使用している。

注

- 1) Sontag, Susan (スーザン・ソントグ) 著 富山太佳夫訳『隠喩としての病い』、みすず書房、1982 年。
- 2) 柄谷行人 『日本近代文学の起源』、講談社、1980 年。
- 3) 東田勉 『認知症の「真実」』、講談社、2014 年。
- 4) 高橋幸男「認知症を生きる」、『老年社会科学』、32 (1)、2010 年、pp.70-76。
- 5) 『読売新聞』、1972 年 6 月 29 日夕刊、p.1。
- 6) Behuniak, Susan M. “The living dead? The construction of people with Alzheimer’ s disease as zombies.” *Ageing & Society*. 31 (2011): 70-92.
- 7) Zeilig, Hannah. “Dementia As a Cultural Metaphor” . *The Gerontologist*. 54-2 (2014): 258-267.
- 8) 橋本五郎「新聞のカー新聞の読み方で世界が見える」、『労働調査会』、2013 年、pp.72-73。
- 9) 高橋正雄 「<文学にみる障害者像>島崎藤村著『夜明け前』、『ノーマライゼーション』18 (9)、日本障害者リハビリテーション協会、1998 年 9 月、pp.62-64。
- 10) 『AERA』、2015 年 11 月 2 日号、p.15。